Japan Association for Language Education and Technology

ＬＥＴ関東支部だより

第４２号
２００８年１１月発行
外国語教育メディア学会

.wwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwww

ごあいさつ

外国語教育メディア学会関東支部長　　見上　晃（拓殖大学）

－これからのＬＥＴの活動の進む方向－

ご挨拶が遅くなり申しわけありません。この 4 月からまた支部長を務めさせて頂いております。この夏は WorldCALL2008 にはお越し頂いたでしょうか。この大会は世界各地で私たちと同じように教育に携わっている方々が集合した大会でした。新しい知識を吸収した方も、自分と同じように頑張っている方々の姿に刺激を受けた方々もいらっしゃると思います。

さてこの 12 月から新非営利法人制度が施行されます。これを期に学会とは何なのかを考えてみました。新非営利法人制度の下では私たちの選択肢は３つあるようです。１．公益法人になる、２．一般法人になる、３．今のまま任意団体で居る、です。

今の学会の運営方法から見て、事務所を構えしかも会計を専門家に委ねることは無理だと思います。するともう残っているのは３の今のまま任意団体を続けるということになりそうです。簡単に答えが出てしまって申しわけありません。

では「任意団体」とは何でしょう。関東支部の 116 回大会にいらっしゃった方には挨拶の中で触れさせて頂きました。

例としては、こんな例が分かりやすいのではないでしょうか。立ち話をしている家庭の主婦 5 人がいます。近くのスーパーより遠くのスーパーの方が値段が安いというのです。ただ遠くのスーパーに行くと交通費が必要で価格の差額分がなくなってしまうというのです。そこで話し合い、5 人のうち 2 人が代表して買い物に行くことになりました。自分の買い物リスト分の代金と交通費の 5 分の 2 をそれぞれが負担します。2 人はボランティアを申し出た方が出かけることになりました。

これが任意団体の基本形です。活動に必要な経費はそれぞれが分担し、労働はボランティアが引き受ける。買い物に行ったボランティアも行かなかった人も負担は同等です。

LET ではこの経費は学会費と呼ばれています。またボランティアは運営委員と言われています。ボランティアも経費を同等に負担していますし、ボランティア以外にも発言権はボランティアと同じだけあります。

この任意団体のシステムをあまり理解されていない方もいるのではないでしょうか。誤解の甚だしいものは「運営委員がお金を貰って働いている」というものです。実際には運営委員はお金を貰っていませんし、それどころか交通費も自腹で学会のために自分の貴重な時間を割いてくれています。

またボランティア以外の方々は自分たちは運営に参加できないと思っているのではないでしょうか。これも違います。運営委員以外の方々の意見があれば、運営委員はそれをできるだけ実行できるように努力しています。

残念なのは運営委員以外の意見がなかなか聞こえてこない点です。皆さんが要望を出して頂ければどんどんと対応していきます。「自分はこう思うが、これは自分だけだろう」と諦めてしまうのではなくどんどんとご意見を頂ければ幸いです。運営委員ができるだけ多くの方々から意見を頂けるよう開かれた学会としていきたいと思います。是非ご協力をお願いします。

小学校の「外国語活動」

―小学校英語教育で肝心なことは何か―

外国語教育メディア学会名誉会長　國吉　丈夫

今年の３月２８日に公示の新しい小学校学習指導要領によると、２０１１年度から「外国語活動」が小学校５，６年生に必修となる。そこで、小学校の英語教育では何が肝心なことか、項目をあげて述べてみたい。

①　１１，２歳ぐらいまでは、言語習得の上では特別に敏感で有利な時期にある

英語の言語音を聞いて敏感に感じ取り、その音をそのまま発音することができる。また英語の話し言葉の生活に浸るだけで、いつの間にかことばがわかるようになるし、英語を使うこともできるようになる。「英語で話しかけても子供たちにはわからないだろう」などと簡単に決め付けてはいけない。自然な表現、豊かな話し方で接したいものである。英語を母語とする人たちと同じようなことばの力を身につけてしまう可能性がある。小学校の英語教育に最も期待するところである。

②　言語は本来音声によるものであり、「音声言語が言語である」という正しい認識が重要で、小学校英語教育の基本となる

英語の学習は音声英語によって効率的にもなる。言語音は耳の鼓膜を打ってすぐに消える。聞こえてくるままに頭を働かせるしかないわけで、日本語の頭で処理する余裕はない。けっきょく、音声英語を理解しようとすることは英語の頭をつくることに直結する。また、学習が進まないうちに文字に注意を向けさせると、文字だけに興味をもって、ほんとうの英語学習から離れてしまう恐れがある。文字は目の前に残っているわけで、日本語の頭で処理して解読することができる。明治以来の多くの日本人の不毛の英語学習を繰り返させるわけにはいかない。

③　小学校英語教育では指導者の役割が決定的である

学級担任が指導にあたることが多くなると思うが、条件が整えば子供たちにとっては最高の指導者となる。そのためには英語の力を伸ばす努力をすることである。誰でも中、高、大と少なくとも８年間は英語を学んだ経験をもつ。日常の生活表現を１日一つ使えるようになれば、年間で３００以上の表現を使うことができるようになる。しかも、その英語を使って子供たちに実際に話しかける努力をすること自体が、実は本人の英語力を伸ばす素晴らしい手段となる。短くて、やさしい英語表現を、口に出して実際に使うことによって、英語の‘ことばの核’となる力が身につくからである。

④　発音中心、単語中心の指導に終始すべきではない。文表現による英語活動が大半を占めるべきである

発音に苦労する子供たちはあまりない。単音の練習よりも、伝統的なマザーグースの唄を一斉に唱えさせるなどのことばのリズムの指導がよい。また単語中心の指導はやり易いし、子供たちを夢中にさせることもできる。しかし、最も重要なことは文表現の力を身につけさせることにある。教室を楽しい活気ある場にして、文表現でいっぱいの英語活動にすれば、どんな子供も英語を習得してしまう。

⑤　言語学習を成功させるためにはできるだけ頻度を高くすることが鉄則である

「外国語活動」が年間３５時間の必修というのであれば、１時限３０分として週２時限を確保し、特別活動の１時間を同様に使って、計週４時限とする。その上に校内放送を利用して英語番組を流すなどの工夫があってよい。さらに現在は、様々な学習機器が利用できる。授業時間外に、学校内外で理想的な形で英語学習を補うことが可能な時代になっている。週１時限だけというのでは言語教育にはならない。世界の常識である。

小学校の「外国語活動」
……　今が見直しのチャンス

渡辺　浩行　（宇都宮大学）

Absolute Beginners（ＡＢ）　と False Beginners（ＦＢ）

英語（外国語）の初学習者は、英語学習のＡＢにあたる。何らかの原因で問題を抱えると、その学習者は英語学習のＦＢになってしまう。

小学校英語活動が導入されるまで、このことは、もっぱら中学校英語以降で考えるべきことであった。しかし、これからは、小学校教師も考え、具体的な対応（指導実践）をしなければならない。

ＦＢを生む小学校英語活動の落とし穴

実際、小学校英語活動ですでにＦＢが生まれているようだ。

その原因は様々である。自然な文脈がないパターンプラクティス的繰り返し活動、本来の意味のやりとりがない似非コミュケーション活動、英語が置き去りでテンションだけが高いゲーム活動、国際理解が無理やりはめ込まれた道徳的（？）活動、等々。

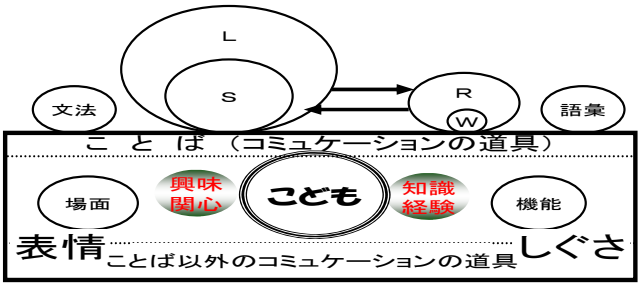
もちろん、「英語音声のインプット重視」で「話すことを急がない」、児童に合わせた、「児童一人ひとりにとって意味内容のあるやりとり」を展開している活動もある。ＦＢが生まれることのない、ＡＢにふさわしい英語活動である。そして、それを繰り広げる小学校教師の目の前には、生き生きとした子どもたちがいる。

小学校英語から学べない中高大英語教師

我々英語（外国語）教師がプロとして当然知っていなければならないこと。それは、英語学習の過程でＡＢがＦＢになっていく要因、あるいは、英語が不得意になり、英語嫌いになる要素である。小学校英語は、中高大英語教師にそのことを「もう一度真剣に考えろ！」と問いかけているような気がする。

小学校教師は、まだ、英語（外国語）教育のプロではない。しかし、かなりの人たちはＦＢを生みたくないと懸命に取り組んでいる。にもかかわらず、それに理解を示し、協力する中高大英語教師は少ない。

「小学校英語からＦＢを送ってきてもらっては困る！」という声を聞く。なぜ、「生徒がＦＢだったら、私がその原因を少しでも取り除いてあげましょう」と言えないのだろうか。ましてや、ＦＢの子どもたち、false learnerとなった英語学習者たち（中高大生）を、さらに窮地に追い込むプロ（？）になってはならないはずだ。



小学校英語を支持する中学校英語教師は、「実際小学生に英語を指導した教師」＞「小学校英語活動を観た教師」≫「一度も小学校英語活動を観たことがない教師」、という順になっている【第８回小学校英語教育学会『外国語活動必修化への提言－中学校英語教員の意識調査を通して－』、太田洋（駒沢女子大学）・本田勝久（大阪教育大学）】。小学校英語から学ぶということは、小学生(可愛い学習者)から学ぶということに他ならない。優れた医者が真摯にその患者から学ぶが如くである。

ＬＥＴからの学び

ＬＥＴ関東支部第１２０回研究大会で『電子ボード（電子黒板）を利用した授業』、岡澤永一（暁星小学校）・久埜百合（中部学院大学）、の発表があった。直後、暁星小学校を訪ね、岡澤氏の実践を目の当たりにした。ぶれないコミュケーション観と学習者観（図参照）がほのぼのと伝わる英語授業を堪能させていただいた。

今、私の周辺で、電子ボードの活用が広まりつつある。

ＬＥＴ関東支部第１２０回（2008 年度）研究大会報告

跡部　智（慶應義塾普通部）

１．大会テーマ

今回のテーマは「学習コミュニティーを生み出す授業」でした。学習コミュニティー(learning community)とは、学習者同士で教え合い、励まし合い、時には切磋琢磨しながら、共通の目標に向かって、課題に取り組んでいく学習者の集合体です。

学習動機を高めるためには自律的な学習を身につけることは重要ですが、その「動機づけ」や「やる気」を維持するために、学習者同士の共同体意識を高め、学習者の情意に働きかける仕掛けが必要だろうという問題意識のもと、協働（協調）学習の中で学習コミュニティーを生み出し、活性化させるために、授業者はどのような工夫ができるか、に焦点をあてたいと考えました。

今回の参加者は１５０名を越えたそうで、近年の参加者減少傾向を憂慮していた企画チームとしては、喜ばしいことでした。東洋学園大学の立地の良さとすばらしい施設に感謝するとともに、ニーズに合った企画テーマを設定することの重要性を痛感した次第です。

２．講演

講演は、田尻悟郎先生にお願いしました。田尻先生は、昨年まで２６年間、神戸市や島根県の公立中学校で英語を教え、その授業は、ＮＨＫの『わくわく授業』や『プロフェッショナル　仕事の流儀』で取り上げられました。『ニューズウィーク』の「世界のカリスマ教師１００人」に選ばれたこともあります。そして、２００７年からは関西大学外国語教育研究機構に迎えられ、英語教育だけでなく、教員養成にも尽力されています。

話題の中心は、限られた授業時間をどのように工夫して、効果的な授業をおこなうかということで、

１．成績の付け方を明示する。
２．達成感、伸長感が得られるタスクを与える。
３．生徒同士で発想を共有する（知識ではなく発想がポイント）。

といったことを、実例をあげながら説明してくださり、英語力のレベル別で授業をするよりも、先に進んでいるトップランナーが、スローランナーに教えるような仕掛けを取り入れることや、知識がなくても発想を問うタスクを設定して、スローランナーの参加意識を高める工夫も参考になりました。教科教育法の授業は、学生に模擬授業をやらせた後、同じところの授業をしてモデルを見せる、という話しも参考になりました。私の教科教育法の授業でも学生に模擬授業をやらせていますが、ダメ出しばかりになると、情意面であまりいい結果がでないので、批評をするより見本を見せる方がいい結果につながるという気になりました。７０分はあっという間に過ぎ、時間が足りなくなりました。

３．パネルディスカッション

講演の後、田尻先生に、阿野幸一先生（文教大学）、椎名紀久子先生（千葉大学）のお二人にお入りいただき、3 人のパネリストで討論しました。田尻先生の「CALL は嫌いです。」という発言に、お二方が応戦する場面がありましたが、私は、「CALL 教室での授業が嫌い」と聞こえました。体育会の学生が海外から電子メールで課題を提出して来る話しや、スライドを使った文法の説明などで、積極的にコンピュータを利用されており、時間対効果という視点で、トラブルが多くメンテナンスばかりの CALL 教室であるなら使わない、ということだと思いました。

ＬＥＴ関東支部 第１２０回（2008 年度）研究大会 を終えて

狩野紀子（拓殖大学）

2008 年 6 月 7 日、文京区の東洋学園大学本郷キャンパスにて、外国語教育メディア学会の関東支部第 120 回研究大会・総会が開催されました。当日のお天気もよく、交通の便もよい会場だったためか、はたまた大会テーマやプログラムがよかったのか、例年より多い参加者で朝から賑わっていました。特に小学校の先生や大学や大学院の学生が当日会員として数多く参加してくださったようです。今大会より当日会費を 1000 円に引き下げたことも、参加を促す原因となったのかもしれません。とにかく本学会ではあまりお見かけすることのないフレッシュなお顔にずいぶん出会うことができました。

プログラムの最初にあります暁星小学校の岡澤永一先生の「電子ボード（電子黒板）を利用した授業」には現役の小学校の先生が数多くお集まりになりました。小学校に英語の授業が導入されるにあたり、電子ボードの問題は現場の先生の関心の高い事柄のようです。岡澤先生は電子ボートの多様な使用法を非常に具体的にご説明くださり、その後授業の様子もビデオでご紹介くださいました。小学生の元気で一生懸命な姿に会場の雰囲気も和んだ様子でした。

その後の研究発表・実践報告では、例年の支部大会にはない数多くの発表者（10 名）が、5 つの会場に分かれて日頃の研究の成果をご紹介くださいました。発表内容も支部大会とは思えないほど多岐にわたり、またその内容も充実したものでした。私が司会を担当した第１会場では、評価をテーマに、筑波大学の久保田章先生の「英作文の評価におけるより効果的な客観的指標について」、および同じく筑波大学の大学院生長橋雅俊さんの「ＥＦＬライティングにおける全体的評価と言語的特徴との関係」の 2 発表が行われました。どちらも限られた時間内では発表しきれないほど充実した内容で、会場をうならせておりました。

午後は関西大学の田尻悟郎先生の講演、それに続き文教大学の阿野幸一先生と千葉大学の椎名紀久子先生をパネリストに加えて、贅沢なパネルディスカッションが行われました。カリスマ教師としてご活躍の田尻先生のお話を伺うために、会場には若い学生たちが数多く集まりました。パネルディスカッションでは、会場からかなり具体的な質問がだされましたが、パネリストの先生方はこれまたかなり具体的にお答えになってくださいました。

プログラム終了後は、東洋学園大学５Ｆにあります食堂で懇親会が開かれました。残念ながらパネリストの先生方はご都合がつかず懇親会にはご参加くださいませんでした。これも理由のひとつなのか懇親会はこじんまりとしたものとなってしまいました。しかしそれゆえに発表者と話す機会ができ、発表後の質疑応答では解決しきれなかった問題を十分に話し合うことができました。

近年、参加者が減少しつつあった支部大会ですが、今回は多くの人を集めることができました。多くの新人を呼び込む、会員を呼び戻すことが本支部大会の最大の目標でしたから、もちろん課題はあるものの、概ね成功した支部大会といってよいかと思います。

絵を用いた文法事項の定着

笠原　究（聖徳大学）

はじめに

前時代的なタイトルで恐縮です。いまや教育機器・メディアの発達はすさまじく、本学会でも CALL や電子黒板を用いた授業など、最先端の機器を用いた実践報告がなされていることと推察します。しかし一方で、こうした授業環境に恵まれない先生方や、環境が整っていてもソフトを準備する時間が取れない先生方も数多くいらっしゃることと思います。私は現在、大学とその付属中高で大学生から中学生までに英語を教えておりますが、CALL 環境などとはほど遠く、未だに昔ながらの黒板とチョーク、CD プレーヤー（たまに iPod）と手作り教材という環境におります。そうした中で、手軽で有効な視覚教材として、昔から現在まで絵を多用しています。ここでは、高校ライティングの時間で行った絵の活用事例を１つ紹介します。

絵を用いた分詞の後置修飾の定着（高校２年生ライティングでの授業）

生徒は一応中学で分詞の形容詞用法を学習してきていますが、それを用いて表現できるまでには習熟していません。わかることと使えることは別物であり、中高の限られた時間の中では説明に時間を取られて、なかなかインテイクやアウトプットの時間が取れないのが現状でしょう。ここでは絵を用いることで説明の時間を省き、生徒に練習と表現の時間を確保することを目的にしました。以下が実際の授業の流れです。

1. インプット：生徒に図１の絵を配り、以下のように指示します。

“Look at the picture. There are several people in it. I’m going to tell you the name of each person. Listen to me and write down the names of the people in the blanks.

No.1: The boy playing the trumpet is Tom.

No.2: The woman waving her hand is Ms. White.

No.3: The girl standing by the motorcycle is Jane.

No 4: The boy hit by a man is Ken….”（No. 8 まで同様に他の人物も説明する）

以上のように全員を説明し、終了したら、ペアで答えを確認させます。次に教師が “Who is the man painting the wall?” のように生徒に質問し、全員に答えを確認させます。

２．インテイク：教師が先ほどの No.1～No. 8 の文を読み上げ、生徒にリピートさせます。次にペアにして各文をペアで音読させます。

３．アウトプット：図２の絵を配り、ペアにじゃんけんをさせ、次のように指示します。

“Now only the winners can look at the blackboard. The losers must close the eyes. I’m going to write down the names of the two persons in the pictures. Please explain those two persons like I did and let your partner write their names.”

それから黒板に C = Takeshi、D = Janet のように書き、説明する生徒が覚えたら消します。生徒には、C is Takeshi. のように言ってはいけないことを指示し、図１でしたような説明の仕方を使うように 促します（The boy eating some cookies is Takeshi. のように ）。終了したら、役割を変えて、同じように残り二人の名前も書かせます。終了したら、白紙の紙を配り、名前を書かせて次のように指示します。

“Look at the two pictures. Now please write the sentences that describe the persons in the picture. Write as many sentences possible within three minutes.”

このように、最後は学んだ形式をできるだけ書かせ、回収します。

おわりに

絵を使うことの利点はイメージによる理解の促進と準備のしやすさにあると思います。私は文法事項の導入にもよく絵を描いて持っていきますが、100 円ショップで買ったスケッチブックが大変重宝します。ライティングなどではテストにも絵を活用しています。図３は、不定詞の授業で too ～ to V や ask 人 to V といった表現を学習した後に行った定期試験で使用したものです。The homework was too difficult for me to do. とか I asked my father to help me with my homework. などの表現が出てくることを狙っています（もちろんこうした文でなくとも点数はあげています）。絵を描くことが苦手だという先生は、太田洋先生もお薦めの、Wright, A. (1984)著、 *1000 Pictures for Teachers* (Collins.) が参考になるでしょう。こんな簡単な線画でも、十分情報は伝わるものだということがおわかりになると思います。絵を活用すると、授業も活性化します。ぜひお試しを。

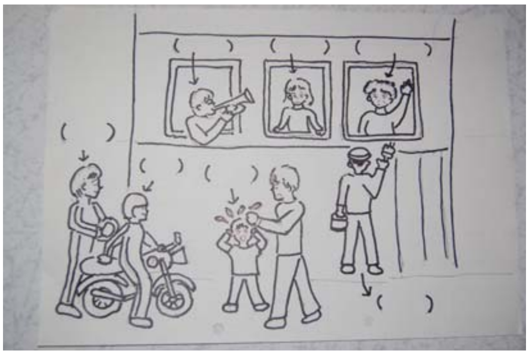


図１

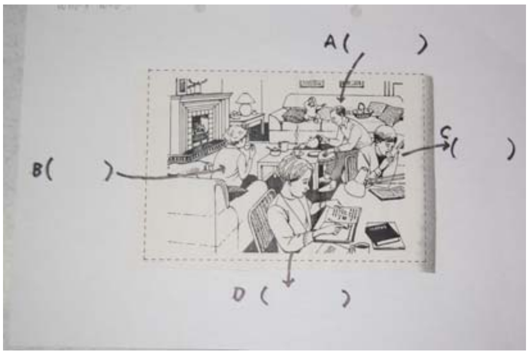


図２

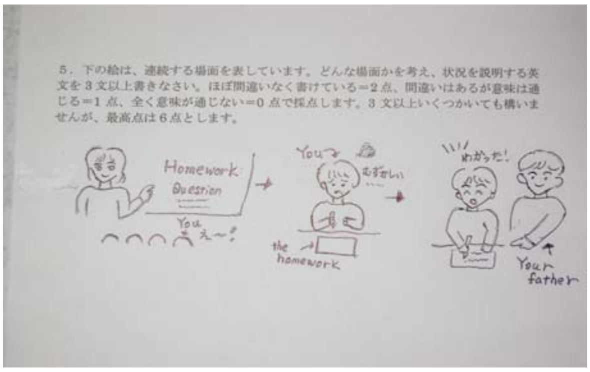


図３

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

次　号　予　告

支部だより（４３号）の発行は２００９年３月の予定です。

内 容　　＊英語教育への提言　＊第１２１回研究大会報告　　＊実践報告
　　　　　＊研究・研修部会だより

★その他よい企画やアイディアをお持ちの方は、支部だより担当まで、情報をお寄せください。

1枚の写真が授業を活気づける

― 特別な機器を用いない拡大印刷の方法 ―

末岡　敏明（東京学芸大学附属小金井中学校）

一般のコピー機が扱えるのはＡ３サイズが最大で、プリンタは標準サイズがその半分のＡ４。特に学校ではＢ４の需要が大きいのでＢ４サイズが扱えるプリンタがあることが多いが、Ｂ４サイズのプリンタは数が少なく、値段も高い。そこで、Ｂ４サイズのプリントを作る場合、まずＡ４サイズのプリンタで打ち出してからコピー機でＢ４に拡大する、などという方法を取ることもある。

しかし、Ａ４かＢ４か、というスケールの話は、プリントのような配布用教材の場合の話である。授業で生徒に一斉に写真や文字を示す場合であれば、それはかなりの大きさの印刷物が必要になる。写真であれば、最低でもＡ３サイズ、できればその倍のＡ２サイズぐらいのものを使いたい。

文字であればできるだけ上手に大きく手書きをするという方法もありうるが、写真では「手書き」というわけにはいかない。学校にあるコピー機はＡ３まで対応していることが多いと思うが、おそらくそれはカラーコピー機ではないだろう。小さな写真を白黒でＡ３まで拡大したら、ほとんど使用に堪えないものとなってしまうはずである。

Ａ１やＡ０などという巨大な大きさの紙にまで対応したコピー機は市販されている。しかし、それらは数十万円代、あるいはそれ以上という高価なものである。学校に１台あればいろいろな場面で役に立つので、それを持っている学校もあるはずだ。しかし、それを英語の授業で日常的に使うのは「勇気」がいるはずだ。ランニングコストが高いからだ。しかも、学校が買うような「巨大コピー機」は白黒コピー機のはずだから（値段の高いカラーコピー機を買う理由が存在しない）、写真を大きく見せるという目的には使えない。　一般的なプリンタはＡ４サイズのものである。これならばカラー印刷ができるものでも安い。これを使ってＡ３やＡ２サイズの大きな絵や文字を印刷できないだろうか。

「用紙いっぱいに印刷」というフリーソフトがある

（http://hp.vector.co.jp/authors/VA010018/kwide/kwide.htm）。

これは、入力した文字をＡ４やＢ４の用紙いっぱいの大きさで印刷するためのソフトである。たったそれだけの目的に特化したソフトなのだが、使ってみると意外に便利である。もちろん、普通のワープロでもフォントのサイズを指定したりレイアウトを調整したりすれば同様のことはできるのだが、やはり専用のソフトは使い勝手が全く異なる。いつも用紙いっぱいに印刷すると、文字数が少ない時には文字が大きくなり、文字数が多い時には文字が小さくなってしまうが、このソフトは拡大率を簡単に調節できるので、文字の大きさを揃えることが可能だ。このソフトを使えば、単語のフラッシュカードが簡単に作れる。このソフトでＡ４にプリントアウトしてから、コピー機でＡ３に拡大してもよい。授業以外でも、校内の掲示物を作ったりするのにも重宝するソフトである。

Ａ４サイズのプリンタで写真を大きく印刷する場合は、一枚の写真を大きなサイズにして、それをＡ４サイズに分割して印刷すればよい。例えば、写真をＡ２サイズに拡大してから４つに分解し、４枚のＡ４の紙にプリントアウトする。そしてそれらを張り合わせればＡ２サイズの写真が出来上がる。

ことばで説明するとややこしいが、やってみれば簡単なことである。しかも、特別なソフトがなくてもこの作業はできる。例えば、Windows に標準で入っている「ペイント」という画像ソフトのメニューから「印刷」を選び、印刷方法を指定する画面をよくみると、一枚の画像を複数の紙に分割印刷する方法がわかる。印刷したい写真をペイントに取り込んで、自分の拡大したい大きさで分割印刷すれば写真を大きくプリントアウトすることが可能だということだ。

この作業は、特別なソフトがなくてもできるのだが、やはり、専用のソフトは使いやすいし、仕上がりもきれいである。例えば、「ズバリ巨大プリント」という市販ソフトを使うと、写真を大きく分割印刷することが簡単に、しかもきれいにできる。分割印刷した後に紙を張り合わせる必要があるが、このソフト

では「のりしろ」も自動的に設定してくれる。また、小さな写真を大きくプリントアウトすると画像が荒くなるが、それを自動的に補正して荒さを目立たなくする機能も付いている。インターネットで見つけた画像を授業で使いたいと思っても、画像データが小さいと拡大した時に画像の荒さが目立ってしまう。それを補正してくれるのは非常にありがたい機能である。また、このソフトは写真の中に文字を配置することができるので、写真と単語を組み合わせて示す教材を作成するのに便利である。

「ズバリ書類拡大」という市販ソフトは、ワード、エクセル、pdf ファイルなど、様々なファイルを拡大して分割印刷することが可能だ。ワードで作った試験問題を、生徒には普通サイズでプリントとして配布し、このソフトで拡大印刷したものを黒板に貼る、というような使い方も可能になる。授業以外でも、強大な垂れ幕やパネルを作るのにも重宝するソフトである。いろいろなものを巨大印刷できるのだから、このソフトで写真を大きく印刷することも可能ではある。しかし、このソフトには画像を拡大した時に画像が荒れるのを補正する機能はない。やはり、それぞれ専用のソフトにはそれなりの特長があるということだろう。

たった一枚の写真を見せるだけでも、生徒の集中力が増し、授業が活気づくことがある。写真を大きく印刷することは特別な機器がなくても、フリーソフトや安い市販ソフトを使えばできるので、大いに活用すべきではないだろうか。

実　践　報　告　［3］

暁星小学校授業参観記

青柳　文男（宇都宮市立清原北小学校）

暁星小学校は、学年３クラス（１クラス 40 人）のキリスト教系私立男子校である。電子黒板活用の先駆者である岡澤永一先生の授業（４年生）を見学した。授業は英語室で行われ、児童は 45 分、席に座って授業を受けていた。発言以外に席を立つことはなかった。先生は、ほとんど英語で授業を進められた。話すスピードは容赦なく、訳すこともほとんどなかった。これは授業中ずっと続いた。授業の密度も大変濃い。授業は、全部が電子黒板を使って進められた。実際の活用例は次のようなものであった。

①文字への意識を高める→「What day is it today?」の問に対し、子どもたちが「Wednesday」と答える。先生はボードに「We_n_sday」と書き、空所を指さし、「What letters do we need here?」と尋ねる。子どもたちが「e」と答えたので、最初の空所に「e」と入れる。「違う!」と言う子がいると、その「e」を指で引っ張ってずらし、代わりの「d」を書き込んだ。誤りが形として残る。

②日本地図→日本地図を映し出し、「県名当てクイズ」をする。本校では３年生で県名と都道府県庁所在地の学習をするので、こういう帯学習が４年生でもできる。ヒントに合った県名を子どもが答えると、地図上でその県に〇を描かせる。リセットして次の問題でまた地図が使える。

他にも、歌を歌う活動の際に楽譜と歌詞を映し出したり（音声も流れる）、文字や絵の一部分を隠したり映し出したり、文字や画像を移動したりコピーしたり、全ての活動を電子黒板上で行う。それはまるで指先で魔法を使っているようである。全ての活動は、この電子黒板がなくてもアナログでできるものではあるが、学習内容の本質を捉えられた上で電子黒板を巧みに活用されているからこそ、学習効果があるのであろう。

e－Learning研究研修部会

塩谷　幸子（法政大学）

名称がコンピュータ研究研修部会からｅ-Learning 研究研修部会に変わってはじめての講習会を２００８年９月２７日（於：学習院大学）に開催いたしました。学習院大学の熊井先生に、授業研究「多様な CALL 環境―Moodle と画面転送機能の組み合わせによる CALL」および、「ウェブによる音声録音システム－Wimba Voice Board の利用」と題するワークショップを行っていただきました。

これに先立ち、首都大学東京の神田先生からは講習会の趣旨説明として「CALL と CMS について」のお話を伺いました。画面転送などの個別機能と CMS を併用することによって、これが重装備のフル規格の CALL システムに代わり得る可能性を指摘され、CALL 授業の将来の展望について解説をしていただきました。

熊井先生による講習会では、ＰＣと画面転送装置（CAI-ACE)を備えた教室で、Moodle を使用した授業を実際に体験させていただきました。画面転送の切り替えが早く、フル規格の CALL システムに劣らぬ授業展開ができることを実感いたしました。また、オンラインテスト作成サイト QUIA の紹介や、ネット上の素材を教材化する際の問題点（著作権など）についてもお話をいただきました。

次に、Wimba Voice Board のワークショップでは、ブラウザで録音できる機能を使って、参加者がシャドーイング練習を行い、互いに聞き合うという体験をしました。そもそもこのシステムは、ウェブ上で音声メッセージを投稿したり閲覧したりするフォーラムを運用するシステムだそうです。音質も良く、操作も簡便でした。LL 機器がなくても PC さえあれば、いつでも、また、どこからでもウェブ上で音声練習や音声のアップロード・ダウンロードが可能となります。

このように、ＣＡＬＬ授業の新たな方向性について理解を深めることができました。参加者は当日参加も含め２５名となり、盛況でした。内容につきましても、アンケート結果から概ね好評を得ました。

これからも授業運用に活用できる技術やサービス等の情報提供を活発に行って参りたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

早期外国語教育研究研修部会

岡澤　永一　（暁星小学校）

本部会では、昨年度より、小学校現場での英語教育における電子ボード（電子黒板）の効果的な活用方法について研究しています。1 月には、初めての研修会を開催いたしましたが、その後も、理論と実践の両面より、電子ボードの可能性を探っています。6 月の関東支部大会では、その時点までのまとめとして、小学校英語教育の実情と電子ボードの教育的効果や使用例を発表しました。

平成 23 年度から、公立小学校では、5･6 年生を対象に英語活動が実施されます。このことを踏まえ、今までの研究内容に、公立小学校での担任の英語活動を、電子ボードがどうサポートできるか、ということも追加していく予定です。来年 1 月後半には第 2 回の研修会を開催予定です。活発な意見交換の場となりますよう、研究を進めています。

音声・映像研究研修部会

飛田ルミ（足利工業大学）

2008 年４月より、部会担当者が佐藤努先生（明治学院大学）から、杉本香織先生（文京学院大学）に代わり、新メンバーで 2008 年度第１回研修会（通算８回目）を７月５日（土）に文京学院大学本郷キャンパスで開催しました。

当研修会は、「e-Learning 教材を用いた英語音声指導：小学校から大学まで」というテーマをもとに、下記の６人の講師による３部構成で行いました。

１）大学部門　①羽田克夫氏（成美堂）が、学習者のレベルに合わせてカリキュラムをカスタマイズできる「成美堂 **e-L** 教材：実用英語 TOEIC テスト対策コース」についてご紹介くださいました。②飛田ルミ(足利工業大学)が、音声認識システムを用いた指導における教員の介在方法や、学生の自律学習を促進することを目的とした使用法などについて紹介させて戴きました。

２）中学校部門　①松岡祐紀氏（ライトハウス）に、高性能音声合成エンジン(TTTS)を搭載し、オリジナルコンテンツの作成も可能な「音声認識システム SpeaK!」と、中学校英語テキスト（三省堂）用ソフト「e-Book」をご紹介戴きました。②阿久津仁史先生（文京区立第八中学校)が、中学校の音読指導において SpeaK!を利用し、適切な音読練習回数に着目し、音読スコアの変化を用いて効果を検証した研究についてご報告くださいました。

３）小学校部門　①Mr. Koji Kato (Moonshoot)に、現在開発中の小学生用英語教材についてご紹介戴きました。元マイクロソフトのエンジニアでシアトル在住の加藤氏は、VISTA 開発も担当なさっており、昨年英語教材開発会社を起業するため独立し、現在２作目のプロタイプを開発中です。②図子啓子先生（武蔵野東小学校)は、小学校における iPod を利用した音声指導について、参加者も音楽に合わせて発音練習したり、歌を歌ったりする体験型のデモンストレーションを行ってくださいました。

大学、中学校、小学校の先生、賛助会員の方々約 20 名の LET 会員の皆様にご参加戴きまして、研究会終了後も活発に意見交換が行われておりました。ご参加、ご協力くださいました皆様にお礼申し上げます。

なお、今年度第２回目の研修部会を、１１月２２日（土）に、LET 関東支部事務局長下山先生を講師にお迎えして開催する予定でおります。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

教材教授法研究研修部会

久保田　章　（筑波大学）

当部会では、近い将来に大学生向けの総合教材の作成を計画しており、その準備のために、今年度のテーマを「教材開発のための基盤研究」に設定しました。

部会員はこれまでも映画やウエブサイトを含むいろいろな映像や音声素材の収集を行い、語彙や文法、言語機能などの観点から分析をしたり、授業におけるその効果的な活用方法についての検討を行ってきました。今年度前半は、特に発信面の技能に焦点を当て、高校教科書のタスクの内容や配列の分析を通して、高校における学習者の学習経験の概要を把握することを目的として活動してきました。その結果を踏まえ、今後大学用教材における指導の内容やレベル、活動の種類の検討などを行って行く予定です。

当部会では、活動に賛同してくださる部会員を募集しています。ご興味がありましたら、
下記までお知らせください。

久保田：kubota@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

学習環境研究研修部会

石川　洋一　（日英会話学院）

従来のアナログLLに替わるものとしてCALLが登場してからもうかなり長い時間が過ぎました。当部会では、昨年度までに「ＣＡＬＬ、ＬＬ教育システム意見交換会」と題したCALLおよび新しいタイプのLL専用機器のリサーチを実施しました。
これを受けて今年度からは、より詳しくこれらの機器についてレポートをしていきたいと考えています。私の学校（日米会話学院）で新しいタイプの LL を導入したこともあり、詳細に語ることのできるものはアンペール社の AdiLL-1000 のシステムに限られますが。
さて、今年度は６月に「AdiLL-1000 を使い倒そうMeeting」を実施いたしました。実際にAdiLL-1000 を使用してその特徴を知っていただくとともに、AdiLL-1000 の操作に習熟していただくことが目的でした。参加者の数は少なかったのですが、メーカーの方のご協力も得ることができ有意義なmeetingを開くことができたのではないかと思っています。
この会を開いてみて感じたことは、実際に新しい機器を導入した学校の方でもその機能を十分に試してみる機会は意外に少ないのだな、いうことでした。LL 教室（CALL 教室）が授業で使われていたりとか、ご自分のスケジュールに合わなかったりとかがその主な原因のようです。
学習環境研究研修部会では、今後も実際の機器を提供していただいて操作に慣れる、機能を試してみるといった機会を提供していきたいと考えています。私の学校でも随時見学を受け付けていますので、ご興味のある方はご連絡ください。

（日米会話学院視聴覚室：石川）

編　集　後　記

★　秋は学校行事、各種研究会、研修会等目白押しです。日々多忙を極めているこの時期多くの方々にご尽力いただき、「支部だより４２号」が発行の運びとなりました。　ありがとうございました。
当初は１０月末発行の予定でしたが､諸般の事情から１１月発行になってしまいましたことをお詫び申上げます。
平成 23 年度から公立小学校では、5,6 年を対象に「外国語活動」が実施されます。小学校現場は、実施に向けての準備に追われていると聞きます。参考になる情報や実践例を欲しいとの声もあります。少しでも参考になればと思い「小学校の外国語活動」に関する記事を本号では、多く取り上げました。今後、進めていく上での参考になれば幸いです。

石丸　玲子　（ishi-mr@nifty.com）

★　今回は同僚の先生に原稿をご依頼しました。偶然、学校の印刷室で実践報告で紹介された教材を一生懸命に作成されている先生にお会いしました。「ああ、こうやって授業を作っていらっしゃるのだなあ」と、より一層実践報告の内容が理解できたような気がします。授業の「手作り感」は、口に出さなくとも生徒の気持ちを引きつけるものがあると思います。「手作り感」イコール「暖かみ」を感じさせるような授業を実践していきたいとふと思った一瞬でした。

小林 順子　（kobajun@tkc.att.ne.jp）